

言葉と共に

金野 千紘

私はこれまで何度言葉に励まされ、傷つき傷つけて来ただろう。この本を読んで、言葉の偉大さと、それを形にして世に広めることの大変さを知った。

私はネガティブに物事をとらえがちだ。勉強も部活動も何をやるにもまず、悪い方向に考えてしまう。人との付き合いでも、相手のちょっとした表情や態度、言葉で「私の事、ひよつとして嫌いなのかな。」と思ってしまう自分がいる。しかし、そんな私をいつも救ってくれるのは「自分の価値を信じなさい」という母からの言葉である。

主人公の玄武書房営業部の馬締光也は、言葉への鋭いセンスが辞書づくりに向いていることから辞書編集部に引き抜かれた。そこで、ベテラン編集者の荒木や言葉に人生を捧げる老学者の松本らと共に、新しい国語辞典である「大渡海」を編むことになる。長い長い旅が始まった。恋をしたり、辞書づくりが中断されたりとどんなことがあっても、無事完成させるために、少しずつ少しずつ辞書を編んでいく。馬締はしだいに辞書、言葉の在り方を見

出していく。

「言葉の海は広く深い」。これは老学者、松本が新人編集員に言った言葉である。これは私に、「もっと言葉というものの価値を大切にしなければならぬ」と教えてくれた。

普段言葉を使う上で、言葉の価値など考えたこともなかった。私はこれまで友達とふざけて笑い合ったり、一緒に一つのことを成し遂げたりして言葉で人と楽しさを共有してきた。その一方で、感情のままに冷たい言葉をぶついたり、軽はずみな発言が意外と深く相手の心に刺さっていたりと言葉で人を傷つけてしまうこともあった。これらは私に言葉の重みを痛感させるものとなった。その時私は、言葉＝気持ちなのと思った。言葉は気持ちを形にして示したものだ。その気持ちを表すために、どの言葉が最適なのか、言葉の広く深い海から探し出す。言葉を大切にすることは、気持ちを大切にすることと同じである。それは、発する言葉一つ一つに感情が伴って相手に届く、「言魂」をいつも心に留めておくことだと私は思う。とても基本的なことだが「相手を思うこと」、これが最も大事ではないかと思った。

私は仲の良い友達と以前から遊びに行こうと約束していたのに

も関わらず、遊びに行く話になると、私は勉強しなければならぬという理由から、成績が伸び悩んでいたこともあって、ついカッとなって友達に「あんたは暇でいいよね。」と言ってしまった。後になって、友達の気持ちを少しも考えずになんてひどいことを言ってしまったのだろうと後悔した。友達がずっと楽しみにしていたことをいとも簡単に壊し、大事な友達を傷つけてしまった。あの時、もっといい言葉を言葉の海の中から探し出すことはできなかったのか、今でも悔やむ。私はこの本と出会って「言葉の広く深い海をもっと旅しなければならぬ。」と感じた。

そして、その言葉の海の旅の手助けをしてくれる船である「辞書」の存在を忘れてはならない。辞書編集部に触れて、辞書には必ず編んだ人の言葉に対する情熱が詰まっていると私は考えることにした。

馬締ら辞書編集部は「大渡海」の企画が始まってから十五年たつてやっと完成させた。一つ一つの言葉にしっかり向き合いながら。その十五年間に馬締は結婚し、馬締の初めての恋を支えてくれた下宿の大家タケおばあさん、老学者の松本が亡くなる。十五年という月日は人の環境を変化させ、人をも老いさせていくこと

が一冊の辞書をつくる大変さと共に描かれている。十五年やり続けることは苦勞の連続だろう。それを乗り越えた編集者たちが丹精込めて一冊につくり上げた辞書を私たちは使っている。言葉の海を一冊に閉じ込めた辞書の価値が、この本を読む前後で大きく変化した。もっと辞書を引いて言葉の海を旅しよう。そう思った瞬間だった。

「辞書は真実の意味での『完成』を迎えることがない書物だ。」編集者の一人が言った言葉だ。完成がない。これは人にも言えることではないか。私たちは様々な場面で決断しなければならぬが、どれが正しいかなんて誰もわからない。けれども、人生ってそんなものなのかなと思っっている。正解がない。でもただ未来を信じて進み続けるしか道はない。言葉も人生も無限に広がっていく。

無限に広がる言葉の海で自由な航海をするすべての人のために編まれた舟、それが「辞書」である。この本を通じて言葉の尊さを知った。後世に残すべき大事な財産である「言葉」と共に、それを厳選して一冊にした「辞書」を大切にすべきである。

今日も私は、自分の可能性を信じて、言葉の、そして人生の大

海原の旅を続ける。いつかの笑える日に向かって。